

語釈：インターネット Twitter 上でみる Trump 米大統領の英語 (17) (A Basic Way of Reading Trump-Language)

後藤 寛

何年か前、テレビでの女性整髪料のコマーシャルで、英語のネイティブ女性が“Lux! Super Rich!”と宣伝するものがあった。比較的最近にも、少し違うが似たものを視聴した。商標名で Lux! と聴いた瞬間に、「輝く明るさ、光沢のある滑らかさ」の語感を感じ取ったことを思い起こす。これが語感だと思う。“Lux! Super Rich!”は「ラックス整髪料! しつとりと輝き大変良い!」の意味となるが、英語のネイティブなら誰でもこれを感じ取るはずである。lux は Basic 語 **light** と同系である。電気などの明るさ・照明の単位であるカタカナ語「ルクス」はこの lux である。

lux の印欧祖語の語根音素形 PIE etymon は/LEUG/ (/LEUK/, /LUM/)とされるが、同系語の luxury[ˈlʌɡʒəri] ([ˈlʌkʃəri]) (豪華さ・贅沢さ)、luxurious [lʌɡˈzu:riəs] ([lʌkˈfu:riəs]) (豪華な・贅沢な) の中の [g] 音に印欧祖語の痕跡が見て取れる。一般に [g] 音も [k] 音も同じ意味となる例はすでにくつか見てきた。lucid (明快な)、luster (光沢)、illustration (イラスト)、illumination (イルミネーション) なども同系。

謎掛けなら「illustration (イラスト) と掛けて何と解く?」、「light (光) と解く」、「その心は?」→「話しの中身が明るく (明らかに) なる」のようなこととなる。light はゲルマン系であるが、他はすべてラテン系である〔拙著(2016)「松柏社」、第二部、例(83)参照〕。

語(word)への照準であるが、一方で英語はこの2文字の語のみならず、英のほうのいわゆる「文化」にも注目しないとやはりよく見えてこない。今回は(1)で昨年11月の中間選挙の約2週間後の感謝祭に関する短い tweet を、そして(2)では法執行機関で米国内の治安を守る警察官(law-enforcement officers)に敬意を表する tweet 例を扱う。

(1) HAPPY THANKSGIVING TO ALL! (November 22, 2018)

▲ 昨年11月の tweet である。アメリカでは毎年11月の第4木曜日が Thanksgiving Day (感謝祭の日) で、ディナーでは turkey (七面鳥) を食べる風習がある。彼らにとっては収穫物の神への感謝である。筆者も留学中、大学寮のカフェテリアでこの祝日のディナーには turkey が出されたことを思い起こすが、turkey はどうやら元はアフリカからで、Turkey (トルコ)、ヨーロッパを經由し、新大陸に入ったらしい。七面鳥の肉を見たら Basic で心中、何とつぶやけばよいか? 何のことはない、**fowl meat** でよい。fowl meat named “turkey”ということである。なお、**happy** は「喜び」の意味にも拡張したが、元々は PIE etymon の/KAP/に由来し「獲物の捕獲のこと」で、本連載(1)の⑥、(2)の②、(4)の②、(12)の冒頭ですで見えた。**keep, have** などとも同系。

英語の語釈にはラテン系言語からの考察が有益である。Trump 大統領の tweets は、語釈に参考となるラテン系ロマンス言語スペイン語翻訳版も以前はネット上で当日か翌日には見ることができた。しかし、目下は取りやめになっている。本連載(1)を始めた直後の昨年5月中日以降はネット上で確認できなくなってしまった(昨年1月2日から5月15日までのスペイン語版は今もすべてネット上で閲覧できる)。取りやめは White House の意向もあるらしい。自国第一主義(America First)で、メキシコなど中

米から北米への移民集団(caravan)を排除する Trump 大統領自身は、特にアメリカ西部や南部で日常的に話されているスペイン語はやはり嫌いなようである。

彼の tweets のスペイン語翻訳版サービス(@DJT_ES)の復活を期待するが、今回は本連載で扱っている一連の事項の時間的流れの順序を逆戻りし、**昨年 5 月 15 日のサービス最後のスペイン語翻訳版を英語と対照**しバイリンガルで次の(2)で見てみる。

(2) Today is one of the most important and solemn occasions of the year — the day we pay tribute to the Law Enforcement Heroes who gave their lives in the line of duty. They made their ultimate sacrifices so that we could live in safety and peace. We stand with our police (HEROES) 100% ! (May 15, 2018)

cf. Hoy es uno de los días más importantes y solemnes del año : el día en que rendimos homenaje a los Héroes de la policía que dieron sus vidas en el cumplimiento del deber. Se sacrificaron para que pudieramos vivir seguros y en paz. ¡ Apoyamos a nuestra policía (Héroes) al 100% ! (15 de mayo, 2018)

▲まさに発想(frame of reference)は同一である。まるで語(word)の単なる置き換えでスラスラ英文がスペイン文に変換されている。西洋語は1つを身につければ他に簡単に移行できる。音韻的(phonologically)にはスペイン語には母音が5つしかなく、1音1字の規則的な正字法で、文字そのものが音であり、安定感があり、響きは神秘的で心地よい。英語はノリが必要で一旦リズムに乗ってしまえばよいが、乗れないと発音法(enunciation)・調音法(articulation)が難しい。筆者自身はこの英語文とスペイン語文で、統語法的(syntactically)にもスペイン語文のほうがサラッとしていて簡単に感じる。

アメリカでは毎年 5 月 15 日が国家平和担当官(警察官)記念日(National Peace Officers Memorial Day)と定められていて、この日には殉職者を偲び官庁では半旗が掲げられる。内容は「今日が殉職した警察官に敬意を表する重要で厳粛な記念日である。彼らはわが国の安全と平和のため、みずからの命を犠牲にしたのだ。われわれは 100% この警察官(英雄)たちと共にある！」というものである。

英文・スペイン文のそれぞれ最初の下線部は「殉職した」の意味で、英語の in the line of duty は慣用的な言い方である。「殉職」に相当する語(word)そのものは英語にもスペイン語にもなく、「彼らは殉職者であった」を Basic で分析的に言えば They were public servants who did what was truly great at the price of death. などよかろう。

「殉職した」の分析的な言い方は英語もスペイン語も、それぞれ次の下線部前半で言い換えられている。英語のほうは They made their ultimate sacrifices ...となっているが、なおやや分析的(analytic)とも言える。スペイン語のほうは(Ellos) se sacrificaron (= They sacrificed themselves.)で総合的(synthetic)である。外国語としての修得で、日本人などにはやはり基本的に言文一致体でもあるスペイン語のほうが思考上も楽である。

後半部の so that we could live ... と para que pudieramos vivir ... では、後者のスペイン語での para que (= in order that)で導かれる節中では叙法(mode)は叙実法(indicative)ではなく、必ず叙想法(仮定法)(subjunctive)となる。この場合の pudieramos (= could)は叙想法過去形の形式となっている。para que の que (= that)を用いないなら、para nuestra vida segura y pacífica (= for our safe and peaceful life)のようになる。スペイン語を簡略化しようとすれば叙法としての叙想法(仮定法)を極力排除すれば、元々が簡素なスペイン語がさらに一挙に簡素化される。

上の英語での末尾文で、下線で示した stand with は、空間詞 with に注目すればよ

い。stand は微妙な意味的風味が加わるが、中立的には繫辞・連辞(copula) [be 動詞] の are でもよい。この場合 We are with our police ...でも同じ意味となる。一方、スペイン語では1語で apoyamos (= we support)とされていて簡潔である。Apoyamos a nuestra policía ... (= We support our police ...)のようにスペイン語では目的語(O)が人間かモノかで2分割される。人間であれば必ず空間詞 a (= to)を従える。これも理解法上、明確になる。なお、英語の stand は PIE etymon の音素形が/STA/とされ、多くの同系語がある。stay なども同系 [同上拙著、第二部、例(62)参照]。

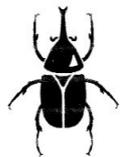
太線の各々 police, policía であるが、*police* はプラス α Basic 語で、PIE etymon の /PELə/に由来するとされ、元は「砦となる高地」の意味だったらしい。この語根からギリシャ語・ラテン語を経て多くの英語となった。古代ギリシャの都市国家 polis [póulis] (ポリス) もここから来たが、「砦の高地→ギリシャの都市国家ポリス→治安→治安を守る人」の意味へと拡張した。Basic 語 **political**、un-Basic 語 policy (政策)、metropolitan {metro (= mother) + poli (= town) + tan (= of, person)} (大都市の・都会人) などは同系 [同上拙著、第二部、例(58)解説参照]。なお、metropolitan の末尾 tan の音声は特にテンポが速くなると [tɲ] と声門閉鎖音(glottal stop)化も起こることは心得ておいてよい。

また、*police* とは別に sheriff {she < shire (= part of a country) + riff (= managing officer)} (保安官) があるが、英語史では前者の初出は 18 世紀、後者のそれは 12 世紀と説く。sheriff は西部劇映画の中でもよく知られる。

なお、英文中の tribute (敬意) は本連載(6)で事実上見た。これに相当するスペイン語 homenaje は英語の同系語としては homage であるが、語根部 hom には「人間」の意味がある。同系語ではなく類義語(synonym)に Basic 語 **respect** がある。

Basic 語を教えようとする Richards, I.A. and Gibson, C.M. 著 *English through Pictures* (EP : Bks I & II)では、たとえば同系語の **bit** と **bitter** は提示されるが **bite**, **boat** は提示されない、また、bit と bitter は頁を飛んで提示され近づけられていない。bit は Bk I (p.103)、bitter は Bk II (p.123)での提示である [本会の *Year Book* No.71 (2019)の拙稿中で示した EP (Bks I & II)での提示語順序「早見表」は、EP の内容が一瞬にイメージ化されてくるもののはずとなる]。なお、un-Basic 語の同系語 beetle は Bk III (p.48)で提示される。短い音節中の音声から意味までを感じ取ることの重要性を示唆するために、教授法では可能な限り同系語(paronym)の一括提示が手早く要領がよい。

冒頭で illustration (イラスト)を見たが、これといわゆる lexigram (レキシグラム・語彙画像文字)とは違う。便宜的にコンピュータ上でアイコンを2つ借用するが、lexigram では un-Basic 語 beetle(カブトムシ)と Basic 語 boat(ボート)は原義(root sense)が同じであることを示すことになる。音的、意味的に「近いものは近づけよ」である。



beetle



boat

同系語 beetle, bait, **bitter**, **bit**, **bite**, **boat** (太字体は Basic 語、標準体は un-Basic 語)の lexigram であれば、たとえば水辺の草むらでカブトムシ (beetle)がえさ(bait)の樹液を求め苦味のある(bitter)木の一片(bit)を噛む(bite)姿とともに、池のボート(boat)が水を切って(噛んで)進む情景などの並列一括提示となる [これを合成レキシグラム

／合成語彙画像文字(composite lexigram : CL)と命名すればよい]。

謎掛けなら、「beetle (カブトムシ) と掛けて何と解く?」、「boat (ボート) と解く」、「その心は?」→「beetle は木を噛み、boat は水を噛んで進み、どちらも噛みつくことが原義」のようになる。また、ゲルマン系で[b] はラテン系では[p]となり、同系語となることを同時に示すには pizza [piːtsə] (ピザ) を提示してもよい。ピザは噛みついて食べるものということになる〔同上拙著、第二部、例(38)参照〕。

なお、同系語(paronym)で要注意は、いわゆる popular [folk] etymology (通俗〔民間〕語源) である。実はこれは学問的・言語学的根拠に基づいたものではない fake であり、惑わされてはならない。本連載では Basic 語を軸に、文献・学界の定説をよりどころとした orthological (純正学的) な見地から「語釈」を試みている。